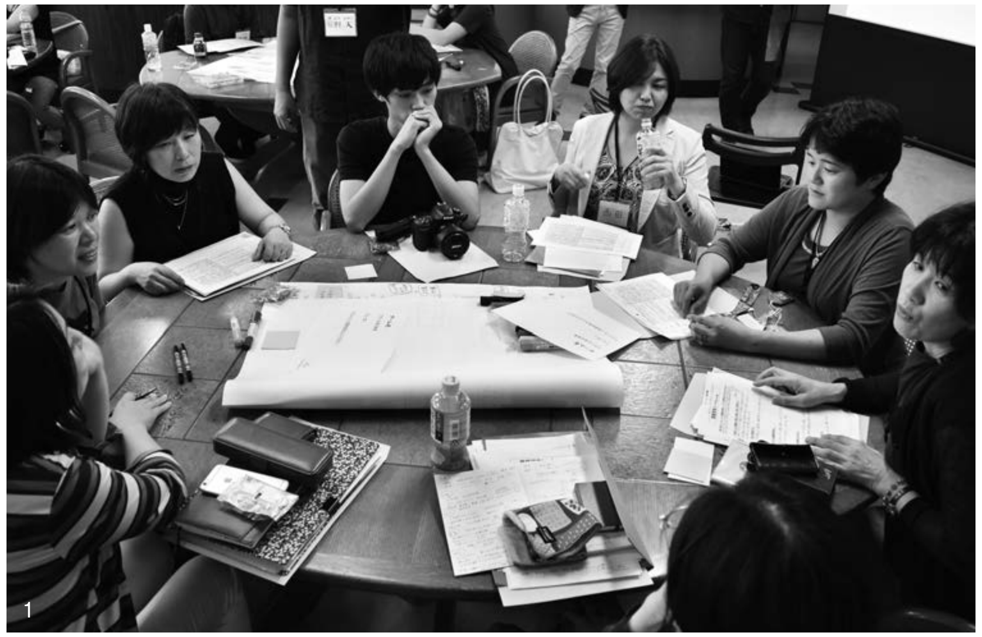
Newsletter
特定非営利活動法人ジェン
2018｜夏｜Vol.72
JEN Japan Emergency NGO

明日のくまもと塾
ASUKUMA

［熊本］

ASUKUMA第Ⅱ期スタート

～復興の担い手を育てるために～


1

2

3

1.ワークショップ風景　2.ワークショップ中、和やかに進行　3.南小国町の風景

熊本も、日本の多くの地方同様に少子高齢化と若者の流出によって、社会をけん引する担い手の減少が大きな課題となっています。ＪＥＮは、熊本地震緊急支援の後、地元熊本の社会課題の解決に取り組む一般社団法人フミダスとパートナーシップを結び、地域活性化の後押しをしています。地域活性化には、地元で主体的に頑張る人が不可欠であり、その支援はＪＥＮのミッションである「自立支援」につながると判断したからです。２０１６年秋にスタートしたフミダス主催「明日のくまもと塾（ＡＳＵＫＵＭＡ）」に参加した第Ⅰ期生は20名。２０１７年３月に研修を終え、それぞれが地元での小規模ビジネスの事業化に向けて走り出しています。

今年４月にスタートした第Ⅱ期は、阿蘇の若手農家とともに担い手の育成と、南小国町の地域再活性化の２つを引き続きサポートしていきます。

VOICE / 参加者の声

阿蘇高菜の種を使ったマスタード

第Ⅰ期生
佐藤智香さん

佐藤智香さんは阿蘇に生まれ阿蘇で育ち、就職を機に大阪へ。平成24年九州北部豪雨を機に、故郷の未来が気がかりに。阿蘇でしか育たない大好きな阿蘇高菜を失いたくない、という強い想いが故郷へ戻る後押しとなりました。

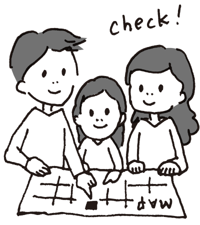
地元に戻った彼女は、阿蘇高菜の種を使ったマスタード、「阿蘇タカナード」の商品化に挑戦。生産効率が低く、どうしても高価になる。なかなか生計をたてるところまで到達できない、という課題を抱えていました。そこで佐藤さんは、ＡＳＵＫＵＭＡへの参加を決断。ビジネスとして軌道にのせるためのビジョンを明確にして、計画を立て、商品を世に送り出すしくみづくりに本格的に着手しました。そして昨年、阿蘇タカナードは優良ふるさと食品中央コンクールで農林水産大臣賞を受賞するまでに成長しました。生産体制や流通など、まだまだ課題は尽きませんが、ＡＳＵＫＵＭＡでの学びを生かし、次のステップに挑んでいます。

編集後記

9月1日は防災の日です。自然災害が多い昨今、災害への備えについてもっと知っていなくてはと思いました。しかし、こういった情報は自分から探さないとなかなか知ることが出来ないと思うことも。
そこで今回は東京都ホームページから帰宅困難者の心得10か条を紹介させていただきます。

帰宅困難者の心得10か条

1. あわてず騒がず、状況確認
2. 携帯ラジオをポケットに
3. 作っておこう帰宅地図（東京都防災マップを見る）
4. ロッカー開けたらスニーカー（防災グッズ）
5. 机の中にチョコやキャラメル（簡易食料）
6. 事前に家族で話し合い（連絡手段、集合場所）
7. 安否確認、災害用伝言ダイヤル等や遠くの親戚
（災害用伝言ダイヤル・災害用ブロードバンド伝言板・災害用伝言板）
8. 歩いて帰る訓練を
9. 季節に応じた冷暖準備（携帯カイロやタオルなど）
10. 声を掛け合い、助け合おう



最後に、**災害用伝言ダイヤル（171）**は通常では利用できません。しかし期間限定で体験利用できるそうです。
お試しすることをおすすめします。

［災害用伝言ダイヤル 体験利用提供日］
◎ 毎月1日、15日 00:00～24:00
◎ 正月三が日（1月1日00:00～1月3日24:00）
◎ 防災週間（8月30日9:00～9月5日17:00）
◎ 防災とボランティア週間（1月15日9:00～1月21日17:00）

ご寄付の方法

JENの活動は、皆さまの温かいご寄付によって支えられています。

生きるちから マンスリーサポーター
あなたの毎月の支援で、
世界の人びとの生きる力をサポートします。

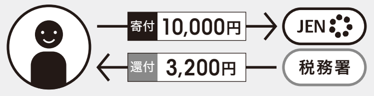
郵便局から
00170-2-538657
口座名 **JEN**

ホームページから
クレジットカードでご寄付いただけます。
（VISA、MASTER、JCB、AMEX）

遺贈寄付
ご自身の財産や大切な方の遺産を、JENが支援する世界中の人たちへ、確実にお届けします。

皆さまからのご寄付は、寄付金控除の対象です。

例えば 10,000円を寄付すると（個人の場合）

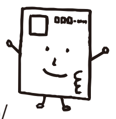


3,200円の所得税の還付を受けられます。
（寄付金−2,000円）×40%

※控除額は寄付金額や年間所得額によって異なります。詳しくはホームページをご覧ください。

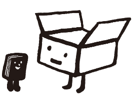
お宝エイド

携帯電話、使わなくなったバッグ、金券などの“お宝”をご寄付ください。
www.jen-npo.org/otakara-eido/



BOOK MAGIC
ブックマジック

ブックオフオンラインとJENによる、今すぐカンタンに参加できる寄付プログラム。
www.jen-npo.org/bookmagic/



Fashion Charity Project
ファッション・チャリティ・プロジェクト

ファッションアイテムを「寄付」または「買って」社会貢献。
http://www.jen-npo.org/fcp

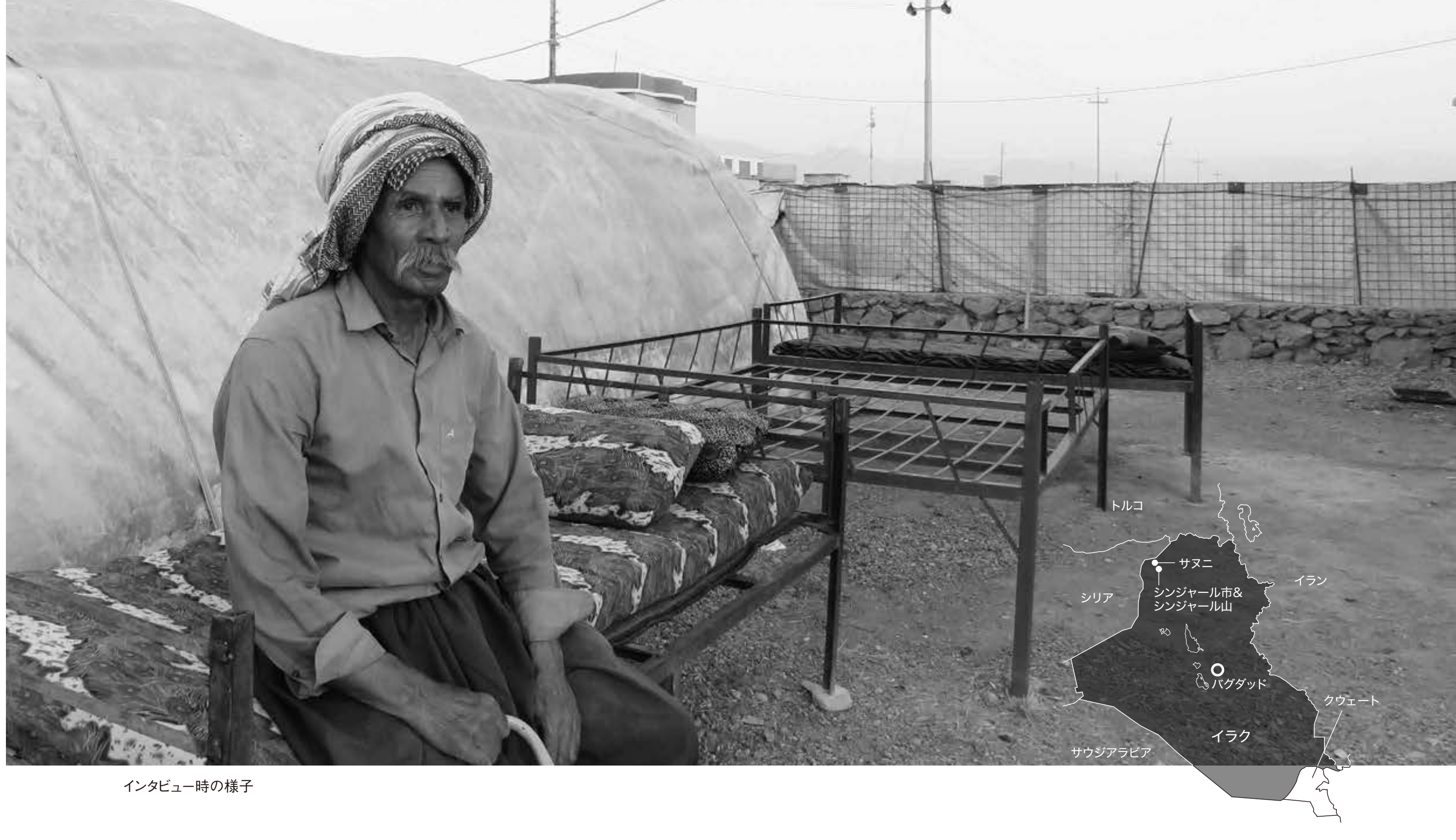
本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載は固くお断りいたします。

事務所移転のお知らせ

このたび下記の住所へ事務所を移転いたしましたのでご案内申し上げます。
職員一同、気持ちを新たに、さらに努力いたしますので、今後ともよろしくお願いいたします。

JEN Japan Emergency NGO
特定非営利活動法人ジェン（JEN） 東京本部事務局
〒169-0073 東京都新宿区百人町1丁目21-20
TEL：03-5937-1780　FAX：03-5937-1781
ホームページ http://www.jen-npo.org
NPO JEN　検索
Japan.Emergency.Ngo　@NGO_JEN

特定非営利活動法人 JEN Newsletter Vol. 72 2018年8月28日発行


トルコ
サヌニ
イラン
シリア
シンジャール市&
シンジャール山
バグダッド
クウェート
イラク
サウジアラビア

インタビュー時の様子

［イラク］

ヤジディ教徒の町、サヌニでの灯油配布

JENが活動を行っているイラク北西部では、2014年以降、武装勢力の台頭により、多くの国内避難民がうまれました。武装勢力から解放が実現した地域では、人々の帰還が少しずつ進んでいます。しかし、住居、電気、水道などあらゆるインフラが破壊された状況から、生活を立て直すのは容易ではありません。

JENは、武装勢力から特にひどい迫害を受けたヤジディ教徒の人々が暮らすサヌニで、寒さ厳しい冬の生活を少しでも楽にしてもらうため、2018年はじめ約2400世帯に対する灯油の配布を行いました。配布後のモニタリング、インタビューを行ったところ、88％の家庭が、暖房、温水器など寒さ緩和のために灯油を活用、97％の家庭から、灯油配布が有用であったとの回答を得ました。

しかし、サヌニに暮らす人々への灯油配布後のインタビューからは、人としての尊厳のある生活からはまだまだほど遠く、人道支援を求める切実な声が伝わってきます。

〈記事〉JENドホーク事務所、プログラムオフィサー、西渕あきこ
〈インタビュー〉JENサヌニ駐在エンジニア、アフマド・イリヤス

JEN
Japan Emergency NGO

配布時のJENチーム

VOICE

受益者の声

お金も支援もなく家が建てられない

クティさん 68歳

「サヌニで生まれ育ち、幸せに暮らしていた。武装勢力が攻めてきた時、息子に背負われて逃げた。7日間、食べ物もない中100キロ以上離れた隣の県まで逃げ、3年間暮らしたが、そこの生活も苦しくてね。去年、自分達の家を建て直そうとサヌニに戻ってきた。でもお金もなく支援もないので、まだ家は建てられていない。」

VOICE

受益者の声

地雷があるため村に戻れない

サブリさん 55歳

「平和だった頃は、シンジャール山の南側のテルアゼルという村に暮らし、農業で生計を立てていた。武装勢力がきて、ヤジディ教徒の人々を虐殺し、兄弟も殺された。妻と共に、クルド自治区まで逃げた。わたしの村にはまだ地雷がある為、戻ることはできず、シンジャール山の北側のサヌニに戻ってくることにした。わたしは妻と二人で子どもがいなく、生活は苦しい。」

［アフガニスタン］

子どもたちの将来の夢や希望が持てる支援を目指して

2001年、タリバン政権崩壊をきっかけに隣国パキスタンから帰還する難民の方々の再定住を支援するためにJENのアフガニスタンでの活動は始まりました。破壊された家や学校の再建、井戸や水路の建設や衛生教育の他、自然災害が発生した際には緊急支援や防災・減災教育も実施してきました。ある女子生徒は「家で家事を手伝うことが今まで私の生活の中心でした。ところが学校に通うようになると、将来の夢や、たくさんの希望ができました。」と話してくれました。

しかし現地は明るい話ばかりではありません。2016年にパキスタン政府が帰還政策を強化し、更に多くの難民が帰還しましたが、帰還先では生計の手段もなく、各地で戦闘も続いています。帰還し定住してゆくには、安全、インフラ、教育など生活できる最低限の環境が必要です。JENは井戸建設等の緊急支援を行いましたが、生活の安定にはまだほど遠い状況です。日本でも世界でも新たな悲劇は起こり続けていますが、アフガニスタンのことも忘れないでいてください。

1.井戸の完成に喜ぶ子ども達
2.女性グループへの衛生啓発

［東北］

陸前高田市の明日を築く中学生

東日本大震災から7年余り、自然に恵まれ伝統が息づく岩手県陸前高田市では力強い復興が続けられていますが、若者の大半が高校卒業後、都会に出ていき、その後地元のまちづくりにかかわる機会がないまま暮らしていくことが課題になっています。

JENは一般社団法人 SAVE TAKATAとパートナーシップを組み、「10代の若者が自分たちの住むまちに関心と愛着を持ち、まちづくりにかかわる」という目標をかかげた事業を支援しています。

10代は自分の生き方や将来の姿に思いをはせ始める頃。同法人による中学校の職場体験や修学旅行のコンテンツ支援によって、生徒たちは地域で働くおとなや、大学で学ぶ先輩たちに出会うなかで、自分と陸前高田市について考え、行動する機会を得てきました。現在生徒たちは、自分の意志で、地元を盛り立てるボランティア活動に参加したり農家を手伝いに行ったり、中学生のまちづくりのグループを立ち上げるなどして活動を広げており、地域の力になっています。

Future
Action
Connect
Evolution
1

1.中学生のなかから、「もっと地域で何かできないか」との声があがり、中学生有志18人でまちづくりのグループ「FACE」が発足。様々なまちづくり活動に取り組んでおり、それをSAVE TAKATAをはじめとするおとなたちがサポートしています。
2.平野部の土地の整備はまだ続いていますが、徐々に商業施設がつくられはじめています。